小学生の学習適応に関連する幼児期の環境とその支援効果について

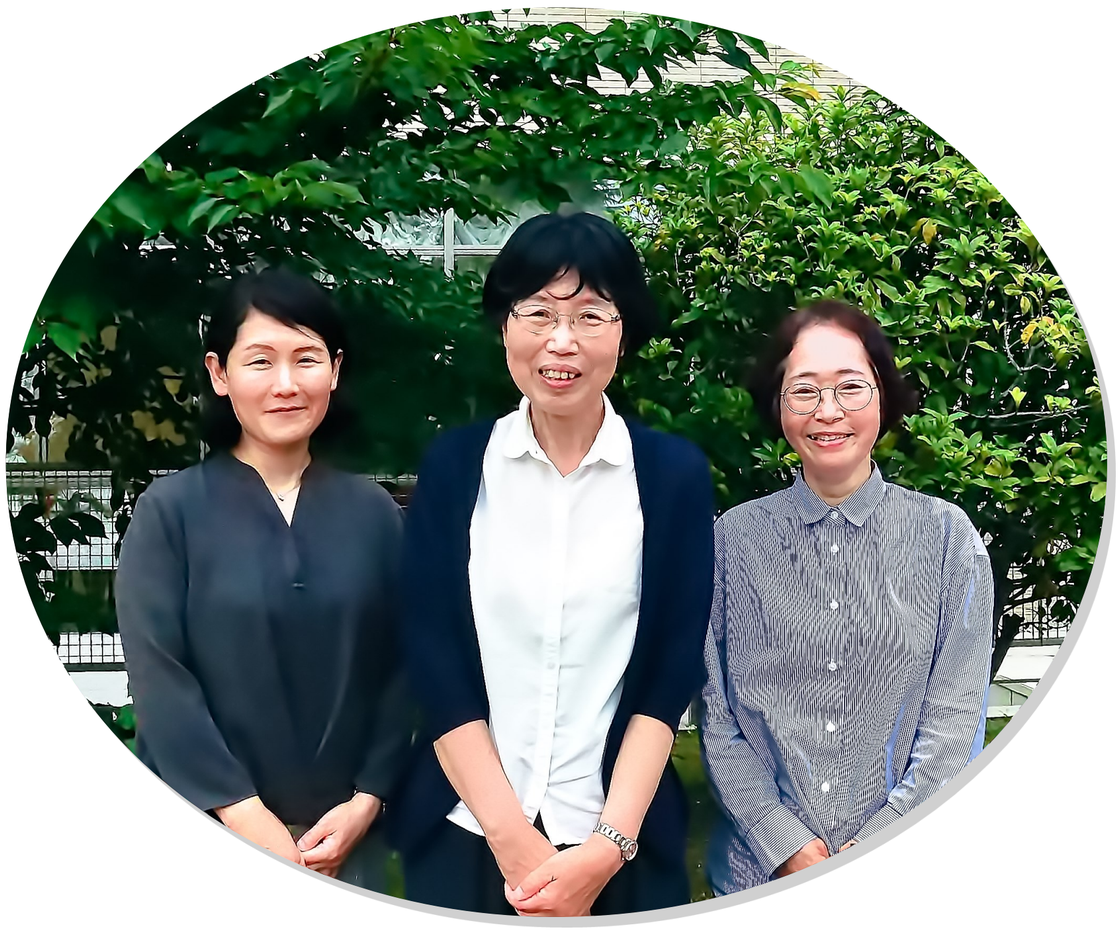
現代人間学部　心理学科

特任教授　高井　直美

教　　授　伊藤　一美

准 教 授　薦田　未央

研究種目 ： 基盤研究(C)
研究期間 ： 2019年度～2021年度
研究分野 ： 教育心理学関連



（向かって左から、薦田先生・高井先生・伊藤先生）

筆者らは、京都府教育庁の要請で、小学校1年生と保護者を対象とした「まなびスタート調査」の分析を担当し、「家庭での保護者との関わりや遊び経験等」と、「児童の算数・国語の基礎課題の結果」との間に、有意な相関があることを見出した。この結果を基に、幼児の発達支援を目的として、2保育園で5歳児に対して、数カード遊び、アナログ時計を用いた保育、言葉遊びの「遊びプログラム」を園の協力のもと実施し、短期支援効果を検証した。また、3保育園2こども園で、1歳児～5歳児の家庭に、4週間に4冊の絵本を貸出し、読み聞かせの効果を保護者にアンケートで尋ねる「絵本の読み聞かせプログラム」を実施した。その結果、絵本に対する幼児や保護者の興味が増加し、親子の関わりも増える効果が見られ、幼児の年齢に応じた絵本との関わりの変化が明らかとなった。

主な著書

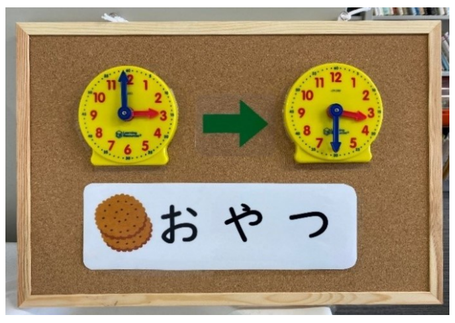
1）薦田未央・高井直美・伊藤一美（2021）就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討（1）―数カードによる数選び―　日本発達心理学会第32回大会発表論文集　29PM2-3A-PS1

2）伊藤一美・高井直美・薦田未央（2021）就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討（2）―アナログ時計を用いたプログラム導入の試み―　日本発達心理学会第32回大会発表論文集　29PM2-3A-PS2

3）高井直美・薦田未央・伊藤一美（2021）就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討（3）「しりとり（言葉集めを含む）」「なぞなぞ」による言葉遊びの試み　日本発達心理学会第32回大会発表論文集　29PM2-3A-PS3

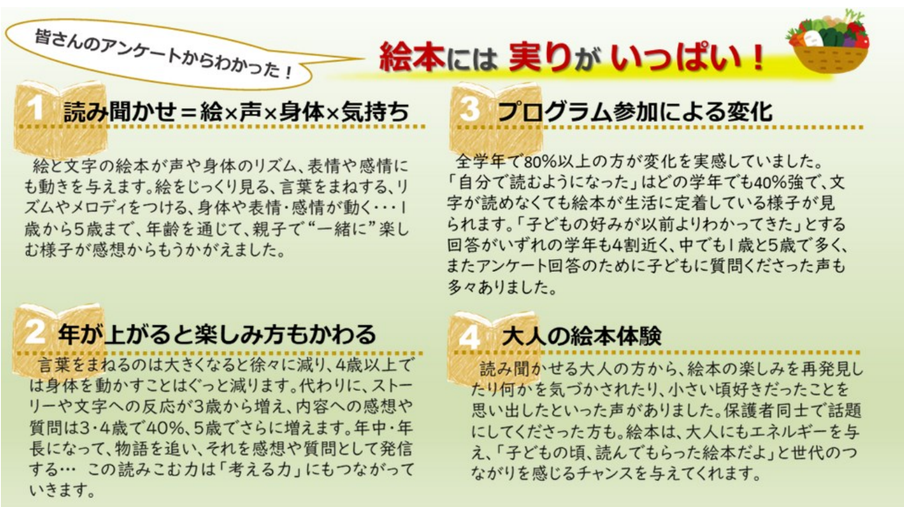
4）高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子（印刷中）　幼児の家庭における絵本の読み聞かせプログラムの効果　保育学研究　60巻

「遊びプログラム」の数遊びで使用したカード



保育活動で使用したアナログ時計パネル

「『み』がつくものは？」、「『しりとり』を続けて」等、言葉遊びのパネル



皆さんのアンケートからわかった！

絵本には 実りが いっぱい！

1 読み聞かせ＝絵×声×身体×気持ち

絵と文字の絵本が声や身体のリズム、表情や感情にも動きを与えます。絵をじっくり見る、言葉をまねする、リズムやメロディをつける、身体や表情・感情が動く・・・1歳から5歳まで、年齢を通じて、親子で“一緒に”楽しむ様子が感想からもうかがえました。

2 年が上がると楽しみ方もかわる

言葉をまねるのは大きくなると徐々に減り、4歳以上では身体を動かすことはぐっと減ります。代わりに、ストーリーや文字への反応が3歳から増え、内容への感想や質問は3・4歳で40%、5歳でさらに増えます。年中・年長になって、物語を追い、それを感想や質問として発信する… この読みこむ力は「考える力」にもつながっていきます。

3 プログラム参加による変化

全学年で80%以上の方が変化を実感していました。「自分で読むようになった」はどの学年でも40%強で、文字が読めなくても絵本が生活に定着している様子が見られます。「子どもの好みが以前よりわかってきた」とする回答がいずれの学年も4割近く、中でも1歳と5歳で多く、またアンケート回答のために子どもに質問くださった声も多々ありました。

4 大人の絵本体験

読み聞かせる大人の方から、絵本の楽しみを再発見したり何かを気づかされたり、小さい頃好きだったことを思い出したといった声がありました。保護者同士で話題にしてくださった方も。絵本は、大人にもエネルギーを与え、「子どもの頃、読んでもらった絵本だよ」と世代のつながりを感じるチャンスを与えてくれます。

「絵本の読み聞かせプログラム」保護者への成果報告書から抜粋

袋に入れて家庭に貸出す絵本

京都ノートルダム女子大学
研究・情報推進課

電話 ： 075(706)3789
FAX ： 075(706)3793
電子メール ： kenkyu@ml.notredame.ac.jp